

### 第3節 教育学部構内H-16区の発掘調査

#### 1 調査目的および経過

本調査区は大学キャンパスの北西部にあたり、教育学部構内H-19区発掘調査地点の北約130mに位置する(Fig.26, PL.20)。吉田遺跡調査団によって大別された調査区外の地域であるが、 $x=405\sim x=417$ 、 $y=374\sim y=395.5$ の範囲内に包括される。昭和44年に実施された本地区周辺の試掘調査では「遺構らしい遺構は見当らなかつた」とされており、これを受けて本地区への教育学部音楽棟新営計画に伴い昭和56年10月12日から11月17日まで調査を実施した。調査にあたっては土層の堆積状況、遺構・遺物の有無ならびに埋存状態の把握を主眼として新営予定地内に幅2mのトレンチを南北3ヶ所、東西2ヶ所に設定して調査を行なった。

その結果、東部において著しい攪乱が観察されたものの、中央部TR2およびTR4において溝7条、土壌1基が確認された。

なお、大学移転前の立地環境から推して相当量の造成時の置土が予想されたため、機械を使用して排除し、それ以下は分層発掘を行なった。

#### 2 層序

現地表面の標高は調査区東部で19.40m前後、西部で19.20m前後で東部から西部にかけてゆるやかに傾斜しており、西側を走る道路部分でグラウンド方向に40~50cm落ち込んでいる。また、北傍体育館敷地部分は調査区北部で急激に低下しており、比高は0.8~1.2mである。

層序は単純で東半部と西半部で堆積状態に若干の差異が

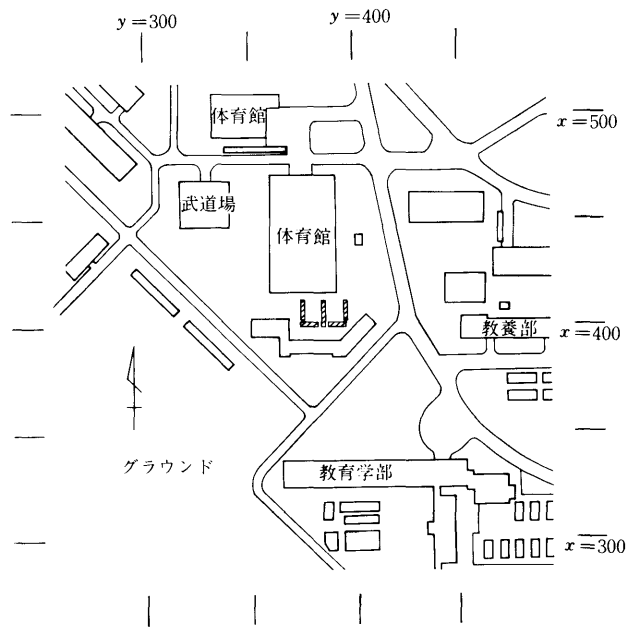


Fig.26 調査区位置図(3600分の1)

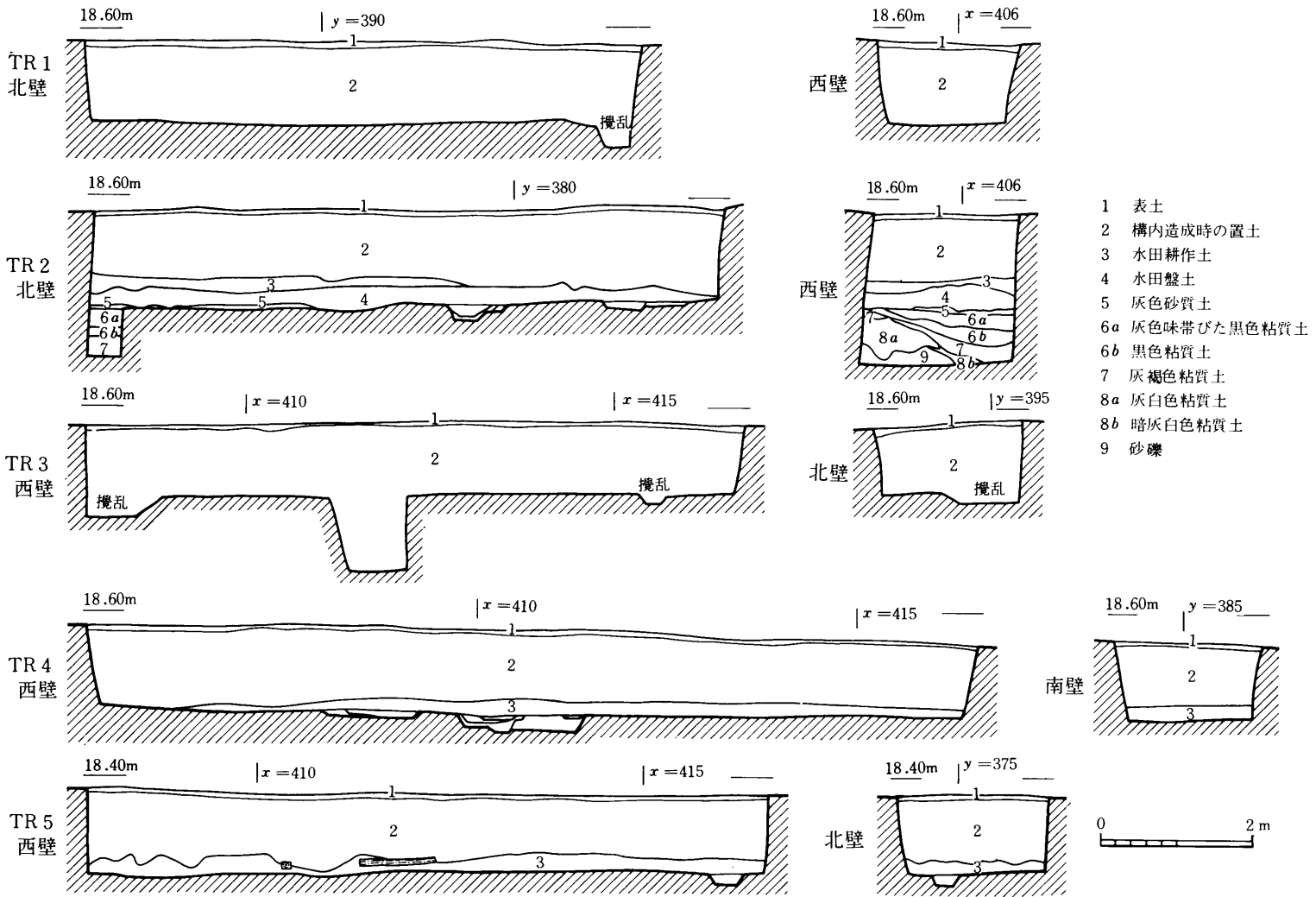


Fig.27 土層断面図

## 層 序

みられる (Fig. 27, PL.20~22)。すなわち、東半部TR1およびTR3では80~90cmの第2層：構内造成時の置土直下が黄褐色粘質土の地山となっており、地山面の標高はTR1で18.40m前後、TR3で18.50m前後である。西半部TR2では第2層の下部に第3層：暗灰色砂質土層（水田耕作土）、第4層：灰黄褐色土層（床土）、第5層：灰色砂質土が堆積しており地山へと続く。地山はあまり安定しておらず東壁部分では砂礫を含み、 $y=377$ 付近から西壁に向かうにつれて漸移的な色調の変化がみられた。6a~8bおよび9層は無遺物層であった。地山面の標高は約18.20mである。TR4およびTR5では85~100cmの置土直下は暗灰色砂質土層を介して地山に続く。地山面の標高は18.10~18.20m前後である。なお、9層において湧水を見た。

### 3 遺構と遺物

検出された遺構には溝と土壇とがありTR2、TR4、TR5においてみられた (Fig.28~30 PL.21~23)。遺構が検出される地山面の標高はTR2、TR4で約18.20m、TR5で約18.10

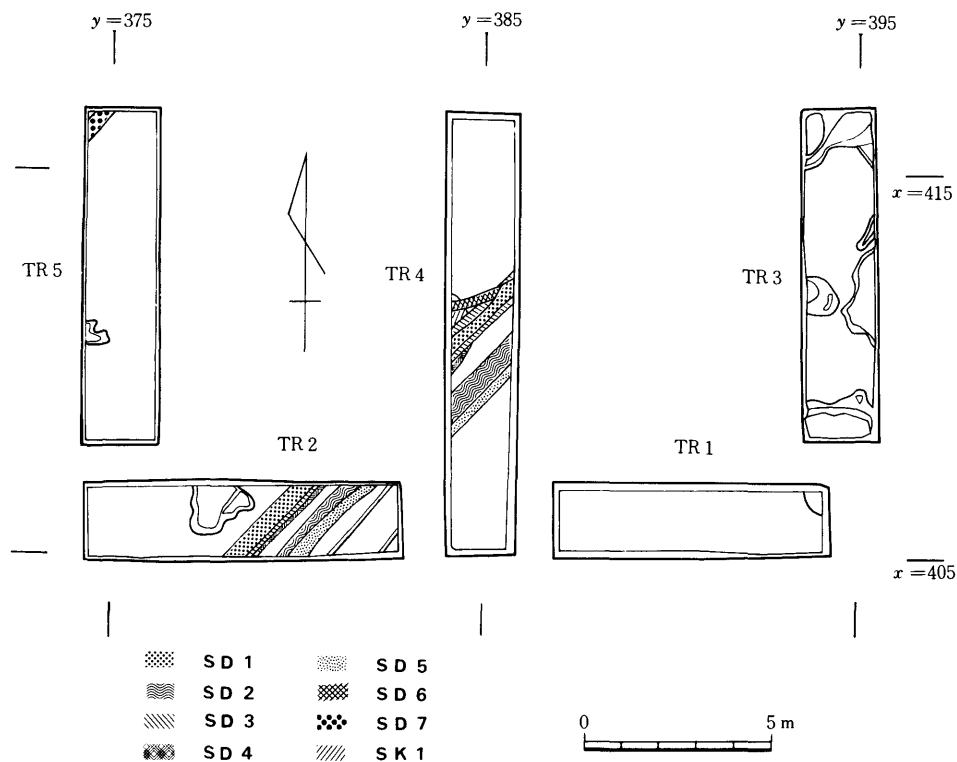


Fig. 28 遺構配置図

## 層 序

みられる (Fig. 27, PL.20~22)。すなわち、東半部TR1およびTR3では80~90cmの第2層：構内造成時の置土直下が黄褐色粘質土の地山となっており、地山面の標高はTR1で18.40m前後、TR3で18.50m前後である。西半部TR2では第2層の下部に第3層：暗灰色砂質土層（水田耕作土）、第4層：灰黄褐色土層（床土）、第5層：灰色砂質土が堆積しており地山へと続く。地山はあまり安定しておらず東壁部分では砂礫を含み、 $y=377$ 付近から西壁に向かうにつれて漸移的な色調の変化がみられた。6a~8bおよび9層は無遺物層であった。地山面の標高は約18.20mである。TR4およびTR5では85~100cmの置土直下は暗灰色砂質土層を介して地山に続く。地山面の標高は18.10~18.20m前後である。なお、9層において湧水を見た。

### 3 遺構と遺物

検出された遺構には溝と土壇とがありTR2、TR4、TR5においてみられた (Fig.28~30 PL.21~23)。遺構が検出される地山面の標高はTR2、TR4で約18.20m、TR5で約18.10

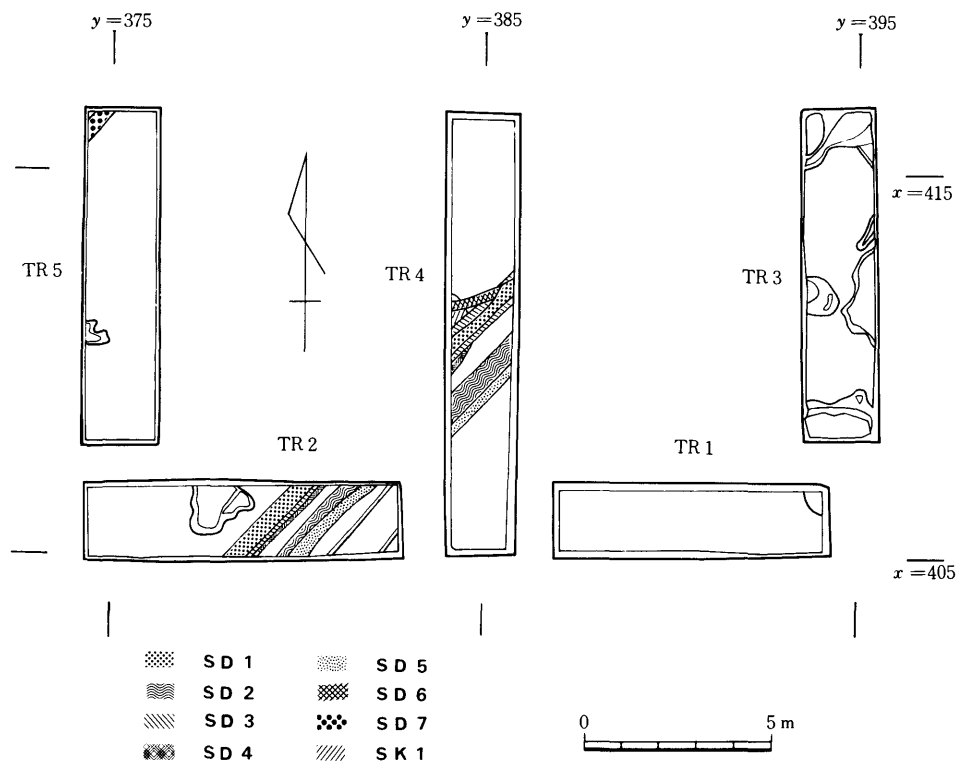


Fig. 28 遺構配置図



mである。溝はいずれもTR2における $x = 405$ 、 $y = 381$ から $x = 406.5$ 、 $y = 383$ を結ぶ落ち込みラインと平行して、北東から南西方向に営まれている。この落ち込みは教育学部構内H-19区における調査で検出された落ち込みと同様の性格を有するものと思われ、TR2における所見では約12cmの段差をもつ。また、同一溝の再掘削の可能性も十分考えられるが、いずれの面も上面をかなり削平され、かつまた単一覆土で単期間に埋没したものと思われ、断面観察等による判断材料に乏しく、検出された個々の溝すべてについて便宜的に名称を与えた。以下、各遺構について述べる。

(1) 溝

溝1

最も新しい時期の溝で溝3を切っている。

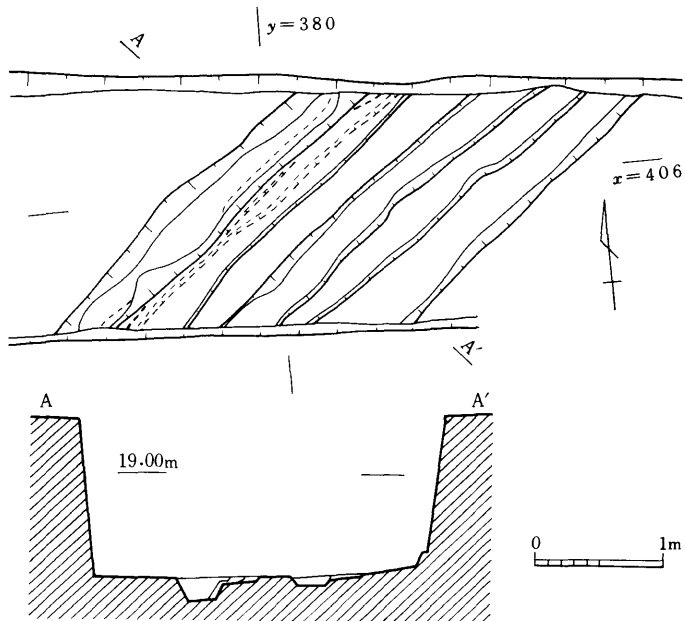


Fig. 29 TR 2 遺構配置図(1/60)

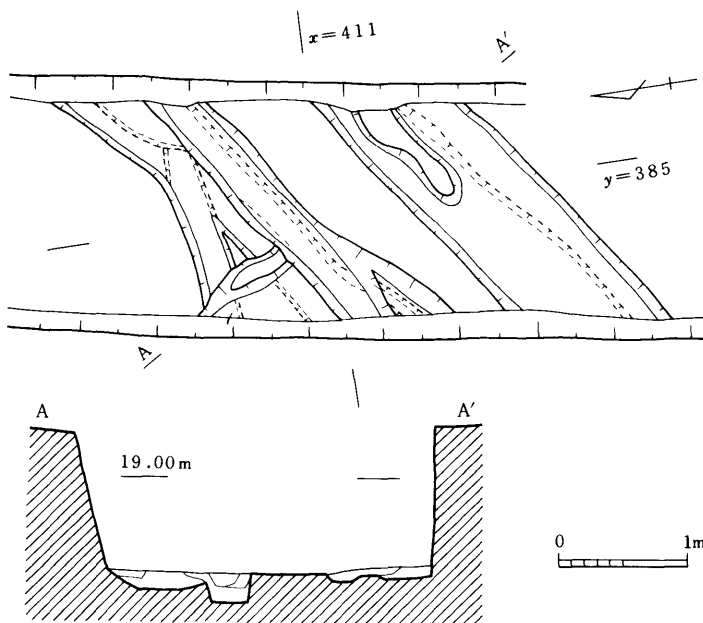


Fig. 30 TR 4 遺構配置図(1/60)

## 遺構と遺物

TR2では西側肩部が2段掘りで幅45～55cm、深さ18cm前後の規模をもち断面形態は逆梯形に近い。暗灰色微砂土の覆土中より溝底から約12cm上面で陶器片が出土したが図示不可能であった。TR4では西側肩部北側のみ2段掘りとなっており、幅はこの部分で約60cm、他は25cm前後である。深さは約14cmで断面形態は逆梯形に近く、覆土から遺物は出土しなかった。

### 溝 2

溝5を切って含まれている。TR2では幅30～40cm、深さ8～10cmで断面形態は逆梯形に近い。TR4では幅60～70cm、深さ3～9cmで溝底は東側において島状に隆起している。灰褐色を呈す粘質の覆土からの出土遺物は皆無であった。

### 溝 3

溝4を切っている。TR2では東側肩部は2段掘りで幅約55cm、深さは最深部で19cmである。TR4では幅36～40cm、深さ12cmの規模をもち、断面形態は逆梯形に近い。内部に充填した暗茶褐色粘質土からの遺物は皆無であった。

### 溝 4

TR4で土壇1を切っており溝6に切られている。西側肩部は2段掘りになっており、幅60～75cm、深さは最深部で23cm。淡茶褐色粘質の覆土からの出土遺物はみられなかった。

### 溝 5

溝2によって切られている。幅は判然としないが、深さはTR2で3cm、TR4で7cmである。内部に充填した黒褐色粘質土よりの遺物の出土はない。

### 溝 6

TR4で土壇1を切っている。幅約25cm、深さ5cmの残存で、断面形態は逆梯形に近い。他の溝と異なりほぼ東西方向に存在する。覆土は灰色味をおびた茶褐色粘質土で内部から遺物は出土していない。

### 溝 7

TR5の北西隅で検出された溝である。幅42cm、深さ約25cmの規模をもち、断面形態は「U」字形に近い。覆土は暗灰色微砂土で遺物は全く含んでいなかった。

## (2) 土壇

### 1号土壇

TR4西側中央部で検出された土壇で溝4によって切られている。全体の形状は不明であるが最深部で深さ25cmである。覆土は黒色粘質土で内部から遺物は出土しなかった。

(3) 小結

今回の調査で明らかになった遺構は単純計算すると溝7条、土壇1基である。その新旧関係は下記の如くである。(旧→新)

1号土壇→溝4→溝3→溝6→溝1

溝5→溝2

各遺構の時期比定は極めて困難であり、わずかに概括的に中世のものとして溝1をとらえるにすぎない。覆土でみる限りでは土壇1、溝3・4・5を弥生時代から古墳時代のものとみることができるとは詳細は不明である。溝3は溝4の掘削の所産であるかもしれない。

東半部TR1およびTR3では構内造成時の置土直下が黄褐色粘質土の地山となっており、地山上部に水田耕作土ならびに床土の残る西半部TR2とは様相を異にする。また、現地山面の比高差は30～40cmあり東半部が西半部とくらべ高くなっている。このことは、水田造営時および構内造成時の削平を考慮に入れても旧来の地山は東から西に向けて傾斜していたことをうかがわせる。また、黄褐色粘質土は本大学構内においては基本的に住居跡、土壇等の遺構が掘り込まれる地山面であるが、本調査区においてはTR5北隅、TR2、TR4で溝、土壇を検出したのみであった。これにはおおむね次のことが考えられよう。(1)住居跡の基本的要素が削平により消失。(2)本調査区のトレンチ間に住居跡の基本的要素が存在する。(3)本調査区が居住区としての性格を有していなかった。(1)については東半部では不明であるが今回検出した溝が小規模のものであるにもかかわらずその流路を検出したことにより困難がある。(2)については従来の調査等により検出した住居跡の要素、特に柱穴等は居住区とみなされる地域については普遍的に存在し、しかもその密度が比較的高いことにより肯首できない。したがって(3)の可能性が強いものとする。それは、本調査区においては混地化の傾向をうかがわせる資料は検出しておらず、意識的に居住区としての機能を持たせず、用、排水の流路として機能したと思われる溝の掘削地域として充てたものと思われる。しかし、本調査区の南約130mに位置する教育学部構内H-19地点では少なくとも弥生時代中期から後期にかけての住居跡で検出され、さらに北に延びる様相を示している。周辺地域の調査が不十分なため今後の調査に期するところがおおいが(3)として捉えられるのであれば居住区および非居住区としての地域範囲の検討は集落立地、規模さらには生業形態を知るうえで興味ある問題である。

〔註〕 (1) 山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」1976



(1) 調査前全景（東から）



(2) TR2西壁土層断面（東から）

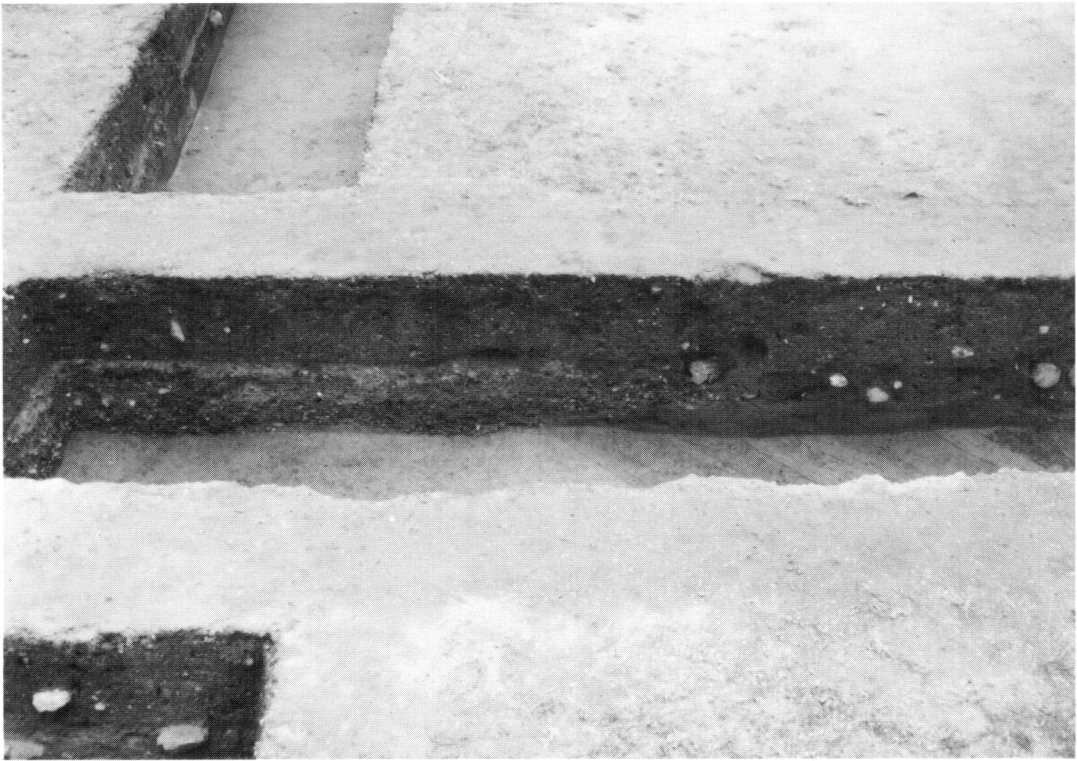


(1) TR2遺構検出状況(西から)

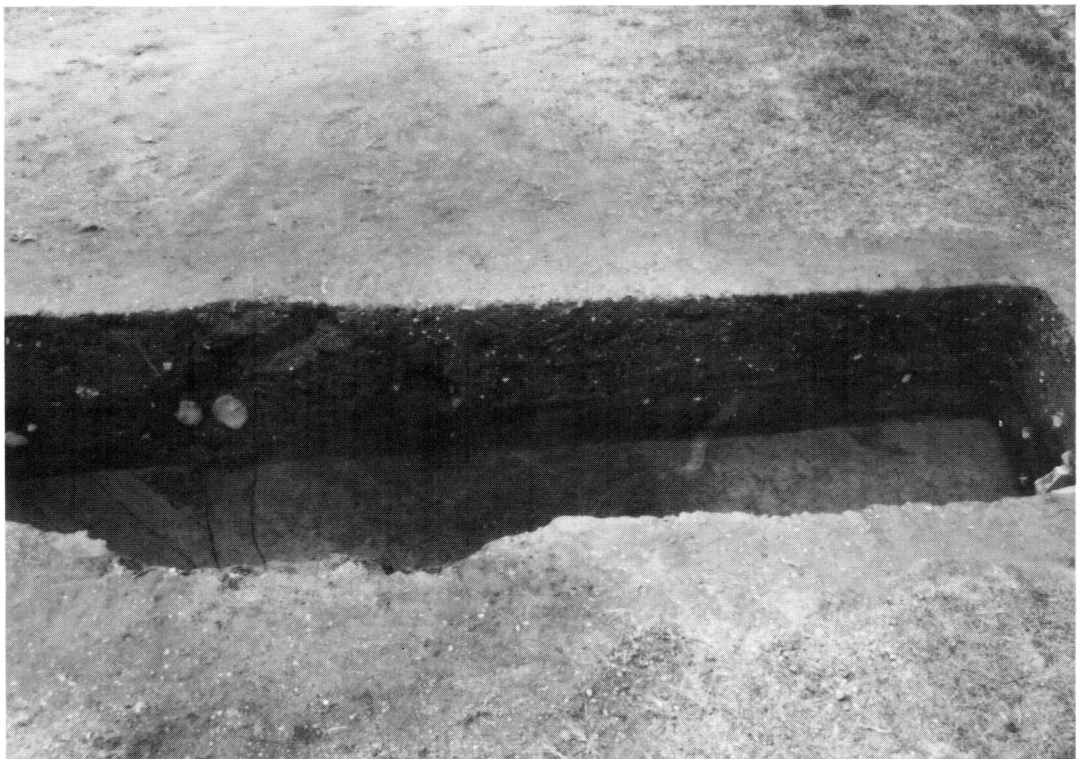


(2) TR2溝(東から)





(1) TR 4 西壁土層断面南半部（東から）



(2) TR 4 西壁土層断面北半部（東から）



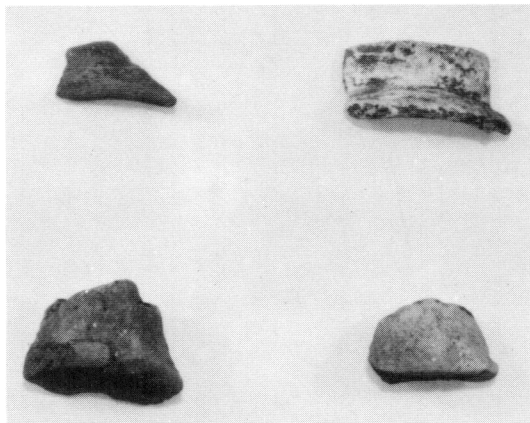
(1) TR4遺構検出状況(北から)



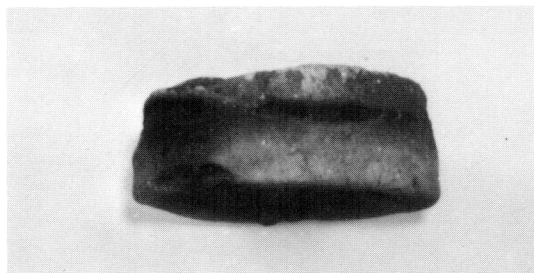
(2) TR4溝および土壌(北から)



(1) H-19区3号土壙出土遺物



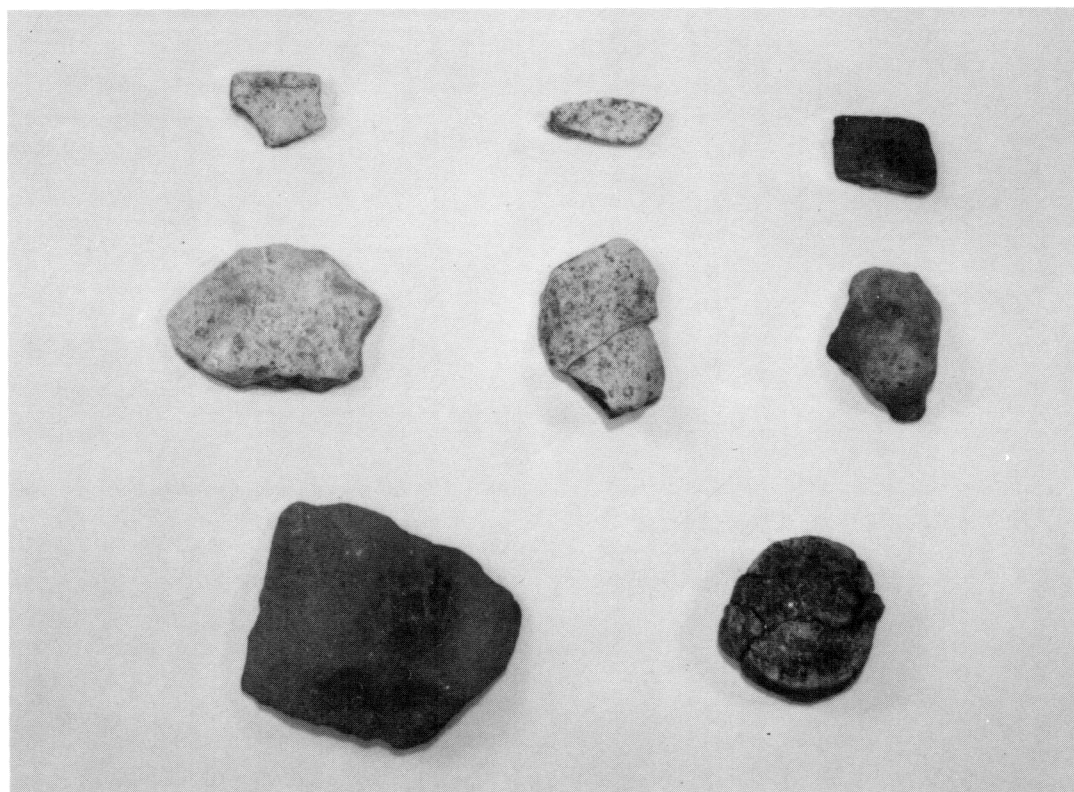
(2) H-19区7号土壙出土遺物



(1) H-19区3号土壙出土遺物



(3) H-16区溝6出土遺物



(4) H-19区溝5出土遺物